

## シンハラ語の談話における指示詞の用法に関する研究

ウィラッコディゲー, アヌシャ, マノージ, ピヤンガー, ウィラッコディー

<https://hdl.handle.net/2324/2556298>

---

出版情報：九州大学, 2019, 博士（芸術工学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	W.A.M.P. Weerakkodi			
論文名	シンハラ語の談話における指示詞の用法に関する研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	中島 祥好
	副査	九州大学	准教授	上田 和夫
	副査	九州大学	准教授	ジェラード・B・レメイン

## 論文審査の結果の要旨

シンハラ語の指示詞が、どのような場面にどのような用法で現れるかを、事例に即して分析し、過去の研究には十分に記述されていない用法の重要性などを明らかにした。先行研究などに基づいて、M系、O系、A系、E系のそれぞれの用法について概要をまとめ、次に、これまであまり取りあげられなかった談話の分析を、主として映画、テレビドラマから取った文例について行った。その結果、これまでの文献には明示されなかった用法が見出され、指示詞が現代のシンハラ語表現を豊かにしていることが明らかになった。従来の研究においては研究者の言語的直観に依存する面が多かったのに対し、テレビドラマ、映画などの談話から大量の実例を取り、データに統計学的な分析を加えるなど、実証的な面に重きをおいているところに本論文の特徴がある。

比較的珍しい言語であるシンハラ語の特徴である指示詞の多様な用法について、大量の実例を集めて分類することには、それ自体学術的な意義がある。M系、O系、A系、E系のそれぞれについて現場指示と文脈指示の出現頻度を調べたところ、この順で文脈指示の相対頻度が上昇することが示された。話者と指示対象との心理的な隔たりがこの順に増してゆくと、従来は言語的直観を主な拠所として認められていたことが、定量的な分析に結びついたことは評価に値する。加えて、M系、E系の呼称用法が、現代における指示詞の用法として注目すべきものであることが示された。

指示詞の用法という、分類を行いやすい事柄に注目し、言語に関わる状況認知の多層性を示し、シンハラ語の特徴とされる一面を定量的に捉えることができたことには相応の学術的意義がある。調査委員の合議により、博士(芸術工学)としての水準を通過するものと認める。